

第 55 回インナーゼミナール大会

研究計画書

ゼミ名	奥田ゼミ	チーム名	八五郎立松の歩み寄り
タイトル	スミス視点から見る過去と現在の経済の対比		
テーマ群	f) 歴史・思想		
メンバー	河野龍之介、藤竹翔宇、安田圭吾、小亀友聖、相模遥人、田中颯馬		
研究計画内容	【研究背景】 私たち奥田ゼミでは『国富論』を中心にアダム・スミスの思想を学んでいる。『国富論』は 18 世紀後半、スミスが生きていた 1700 年代の社会状況や経済構造を背景に書かれたものであり、その議論は当時の産業・貿易・政府のあり方を前提としている。そこで私たちは、スミスが想定していた経済と現代の経済構造との違いに注目した。過去と現在を比較することで、スミスの思想を表面的に理解するだけでなく、その意義や限界、現代への応用可能性をより深く捉えられると考えたため、この研究を行なった。 【研究内容】 本研究では、アダム・スミスの『国富論 (The Wealth of Nations)』における経済思想を中心に、18 世紀当時の経済構造と現代資本主義経済との比較分析を行う。具体的には、①分業と生産性向上、②自由貿易と国家の役割、③「見えざる手」に象徴される市場メカニズムの 3 点に焦点を当て、それぞれが当時の社会・産業構造においてどのような意味を持っていたのかを整理する。さらに、現代のグローバル経済・デジタル経済・国家の再介入といった状況と対比させることで、スミスの理論が現代においてどの程度有効であり、またどの部分に限界があるのかを検討する。これにより、経済学の古典としての『国富論』を歴史的文脈に閉じ込めず、現代社会への理論的応用可能性を明らかにすることを目的とする。 【期待される効果】 本研究を通じて、アダム・スミスの思想を単なる「自由放任主義の原点」として理解するのではなく、彼が描いた理想的な市場と社会秩序の関係を多面的に捉え直すことができると考えられる。 【参考文献】 アダム・スミス『国富論』（大河内一男監訳、中公文庫）（原著 1776 年） 堂目卓生 『アダム・スミス 『道徳感情論』と『国富論』の世界』中公新書（2008 年）		